

気だるげイケメンのお医者さん先生に
不感症の悩みを相談したら

感じないん
だよね？

と言われて
ねちねちクリ責め
開発されちゃった話



■ 登場人物

榎本 麻衣（えのもと まい）

20代前半OL。大きな会社に勤めている。何事も一生懸命だが内気な性格。なついた人にはよくしゃべる。

須藤 由孝（すどう よしたか）

麻衣の務める企業の産業医。水曜日のみ常駐している。

シャツとネクタイの上に白衣を着ている。気だるげな雰囲気と眼鏡と前髪で目立たないが、実は整った顔をしている。

自分でここに来たはずなのに、恥ずかしさで身体が火照る。

先生の目の前。震える手で、服のボタンをひとつひとつ外していく。もたついた仕草な

のに、何を言われることもなく眼鏡の奥からじっと視線が絡みつく。

ぱさりとシャツが無機質な床に落ちた。新調したばかりの下着を見られてしまう。

「かわいい下着、着てきたんだ？ 似合ってる」

頬へと手が伸びてきて、まるで恋人にするみたいに指の甲で撫でられた。暖かい体温が伝わって来て、ほんの少し緊張が解ける。

——わたしは今から、この人に触ってもらうんだ。

そう思うと、お腹の下のほうに、今まで感じたことのない疼きが広がった。

——気だるげイケメンのお医者さん先生に不感症の悩みを相談したら感じないんだよね？
と言われてねちねちクリ責め開発されちゃった話——

窓からひどい土砂降りの空を見てため息をつく。今日は外でお昼ご飯を食べられなさそ

うだ。

どこか人のいない場所で食べられないかな……と、会社の長い廊下をとぼとぼと歩く。

(……あ、ここ、いいかも)

恐らく倉庫目的であろう誰もいない小さな部屋を見つけた。ちょうど机とイスが置いてあって食べやすそうだ。

どうしても食堂や自分の席で食べる気にはならない。あの人に見つからない場所がいい……。

そう思いながらいそいそとお弁当を広げていると、ガチャ、と扉が空いた。

「——お、先客」

「……あつ、須藤先生……!?!」

大して動じることもなくのそのそと入ってきたのは、須藤 由孝(すどう よしたか)先生。うちの会社のお医者さん……いわゆる産業医だ。

圧の強い人の多いうちの会社で、珍しくあまりガツガツした感じがない……というよりは、常に気だるそうなお医者さん。

水曜日しか常駐していないので遭遇はかなりレアなのだけれど、私は貧血で度々お世話になっていた。

話しにくいわけではないけれど、邪魔になってしまうのは申し訳ない。

「貧血の榎本さんだ」

「ふ、二つ名みたいなのやめてください……！　すみません、私どくので……っ」
「ん、なんで？」

立ち上がるうとすると、先生は既にガタガタと音を立ててもうひとつ椅子を出していた。わたしが座っている長テーブルの反対側の隅にカップラーメンを置く。

「なんでって……ここ、先生のごはん食べる場所なんですよね……？」

「食ってるけど、別に俺専用って訳じゃないし」

「でも、お邪魔になるかと……」

「食堂の、……うおっ、と」

カップ麺を空けた須藤先生の眼鏡が、勢い良く曇ってしまった。眉根を寄せて眼鏡を外すと、息を飲むほど端正な目もとが現れる。

……猫背だし目立たないんだけど、実は恰好いいんだよね、須藤先生。

「えっと……食堂、ですか？」

「そう、食堂いるとさ、誰かもよくわかんねえやつに話しかけれんじゃん。俺あれやなんだよね」

「えっ、めっちゃわかります……！ わたしも、そういうのがあって」

「榎本さんも静かに食べたい派ね。じゃあちょうどいいじゃん、ここで食べば」

正直言って、須藤先生は話しやすいし、下手に込み入ったことを聞いてくることもなさそうだから……ここでのんびりご飯を食べさせてくれるのはすごくありがたい。

「じゃあ……お邪魔かもしれませんが、お言葉に甘えて」

改めて座り直して、いただきます、と手を合わせると召し上がれと緩く言われて少し笑ってしまった。

こういうちょっと適当なところ、嫌いじゃないんだよねあ……。

「てか俺会社居る時はいつもここで食ってんだけど、初めて榎本さん見たな」

「あつ、今日初めてここに来たんです。普段はその、公園で……」

「……公園？ そのの？」

「は、はい……ハトと一緒に食べてます、ご飯……」

「ふ……っ、だいぶメルヘンじゃん」

肩を揺らして笑う須藤先生にちょっと嬉しくなる。

——そう。普段のわたしは、近くの公園でお昼ご飯を食べている。今日の土砂降りでは木陰のベンチといえどさすがに濡れてしまうだろうから、困って会社内をうろついていたというわけだ。

「なんで公園？」

「食堂とか、自分の席にいと、話しかけてくる人がいて……」

「ふーん……その人がやなんだ」

「そうなんですつ、課長なんですけど……なんか、今日も一人か榎本、とか、誰もいないなら俺と一緒に食ってやろうか」とか

「うわ、セクハラじゃん」

「えっ、やっぱりそうですよね!？」

今まで悩んでいてあまり人に話してこなかった分、思わず熱が籠ってしまった。箸を止めて須藤先生のほうへと向き直る。

「なんか、最近個人的なメッセージとかも来るんですよ……! 彼氏いないの? とか早く作れ」とか

「うーわマジでやべえな……てかどんな話してんの」

スマホを取り出して、こんなメッセージが来て! と、やりとりの画面を見せる。

いつもあまり表情の変わらない須藤先生が眉根を寄せていて、なんだかちょっとした優越感を感じてきた。

「……いないです、とか言わないでさ、無視すれば？」

「そ、そりゃ無視したいですけど、流石に上司なので……。それにわたし、実際…彼氏いないですし…」

「ふうん……なんで？」

「え！？ あ、煽ってます！？」

「くっ……ちが、はは、違えて」

できないからいいんですけど……！？

思わず箸を止めて、肩が揺れるほど笑っている先生に不満げな顔を見せる。先生は笑ったままこちらに向き直り、肘をついて眼鏡の奥の涼しげな目から視線を送ってきた。

「榎本さん、可愛いんだからすぐできるでしょ？ 彼氏とか。なんで作ってないのって」「可愛く、ないですし…普通にできない、っていうか……そもそも…あんまり、うまくいっ

たことなくて」

「……へえ？」

食べかけのお弁当に視線を落とす。こんなに込み入ったことを話す予定じゃなかったのに、なぜか先生にはすらすら喋れてしまう。

拳をぎゅっと握って様子を伺うように先生を見ると、変わらぬ様子で少し首を傾けていた。

「……笑いません？」

「さあ、聞いてみないと」

「笑わないでくださいっ……わ、私、その……」

「……うん？」

「……ふ、不感症で……！」

「……はあ？」

意を決して話したのに、気の抜けた「はあ？」が帰ってきて目を瞬かせる。先生も驚いた

様子でこちらを見ていて、……どうしよう。恥ずかしくなってきた……。

「ううっ、なんでもないです、忘れてくださ」

「それは無理あるよ流石に。え？ 不感症って……そーいうコト？」

「そ、そうです……いい感じになっても、触られても…気持ちいいとか、思ったことなく
て……それで長続きしなくて……」

「ふーん………？」

先生が改めて私の方をじっと見つめる。何か居心地の悪さを覚えて視線を彷徨わせると、
箸を置く音が聞こえた。

「あのさ……ちょっと触っていい？」

「えっ!？」

「感覚がないとかだと病気の可能性もあるから、確かめさして」

「あっ、なるほど！　だ、大丈夫です」

不感症もある種、病気の種類かもしれない。そう思うとお医者さんである須藤先生に相談するのが一番良かったかも。

少し緊張しながら目を瞑ると、先生の手が首筋へと触れた。

「俺の手が触ってる感覚わかるよね？」

「はい、わかります！ あったかいです」

「ふーん……じゃあ、これは？」

須藤先生の指がゆるゆると首筋を辿り、猫にするように喉元を撫られる。思わず身体がびくっと震えて逃げるように縮こまってしまった。

「く、くすぐりたい……です」

「……なんだ、じゃあ大丈夫なんじゃないの」

ぱっと離されて、先生の手は箸を取った。ラーメンを啜りだしたので、私もご飯を食べるのを再開する。

「皮膚とか、感覚に異常があるわけじゃないでしょ？ 榎本さんは健康診断も特に問題な

かったはずだし、まあ不安とかストレスとか…体のほうの準備不足とかが影響してることはあると思うけど、完全に不感っていうのは考えにくいよ」

「そう、なんですかね……その、元彼に触られたときは全然で」

「それは元彼さんが下手だったんじゃない？」

「うっ……いやでも、自分で触っても、あんまりで……」

「それは榎本さんが下手なんじゃない？」

「うっ……」

ずらず、と麺を啜りながら齒に衣着せぬ物言いの先生。でも確かに、自分ではどう触ればいいかわからなかったし、元彼もそんな感じだったのかも知れない。現に、先生にちよつとだけ触られただけでもくすぐったくて反応してしまったし。

「……じゃあ、先生は上手ってことなんですネ……」

一人そう呟くと、ものすごい勢いで先生が咳き込みだした。白衣で口を押さえている先生に慌てながらも、買ったけれどまだ開けていなかったらペットボトルのお茶を開けて渡す。先生はまだ苦しうにしながらもお茶を受け取ってごくごく飲み干す。と、ようやく落ち着けたようだった。

「あー…死ぬかと思った…。お茶ごめん、ありがとね」

「いえいえ、お気にせず」

「すごいこと言うからビックリしたわ…」

「えっ、あ、わたしのせいだったんですか！？ ごめんなさい…！」

この一瞬で心なしかげっそりとした様子の先生に慌てて謝る。わたしとしては、褒めたつもりだったのだけれど…。

「で、でも先生って、触り方ぜんぜんイヤな感じしなかったんです。だから、そういうのも上手なんだろうなって…」

様子を伺うように眺めると先生は無表情になっている。

わたしはそんなにも、変なことを言ってるのだろうか？

じっとこちらを見てくる視線がなにかいたたまれなくて顔を下げた瞬間、先生が口を開いた。

「試してみる？」

「えっ」

「俺は上手なんですよ？」

「えっ、あっ、上手そうって思っただけで、そ、その」

「だから、試してみる？」

意地悪そうな笑みを浮かべながら椅子に深く腰掛ける先生に、ようやく自分の言っている言葉の意味がわかった。

もしかして誘ってるみたいになって、た……！？

ぶわっと顔に熱がのぼる。それを見て肩を揺らし笑い出す先生。

か、完璧に……からかわれてる……！！

「すみません……わたしが、悪かったです……」

「くくっ……別に？　悪いとは言っていないけどね」

せ、先生みたいな人じゃなかったら終わってたかもしれない…。

恥ずかしさで頭から湯気を出しながら頭を下げる。気をつけます、と呟くと、そうして？と返されてますます恥ずかしかった。

——そのあととも他愛ない話で盛り上がって、あっという間にお昼休憩が終わる時間になってしまった。

「もうこんな時間……結局静かにお昼食べられませんでしたよね、ごめんなさい……！」

「それは榎本さんじゃない？　いいじゃん、俺は面白……楽しかったよ」

「そこで言い直すのもう遅いですからあ……！　もう、あの話は忘れてください……っ」

お弁当を片付けながらまた顔が火照る。恥ずかしいことを言ってしまった……と、反省

していると、不意に先生の顔が近付いて至近距離で見つめられる。

眼鏡の奥に見える幅の広い二重。すらりと通った鼻筋に、薄く引き締まった唇。どこを見ても整っている顔がすぐそばにあって、息を飲む。

「試してみる、の答えは？」

「——……っえ、あ、……っ!？」

「ノーなら今すぐ忘れるけど」

「へ、あ……えっと、わ、わたし……っ」

冗談じゃ、なかったのだろうか。

表情自体はいつもみたいに気だるげなのに、さっきよりもずっと真剣に送られる視線に頬の熱が冷めないし——断れも、しない。

「えっと……そんなつもりじゃ、なく、て……」

「じゃあ、試さない？」

「あっ、……えっと……うう、」

試さない、と言われて思わず名残惜しげに口籠ってしまふ。でもお願いします、なんて言うの恥ずかしすぎるし、そもそもやっぱり不感症で、先生に呆れられてしまったら……なんて思う。

ぐるぐると考えこんでいると、小さく笑って、くしゃりと頭を撫でられた。驚いて思わず目をぎゅっと瞑ると、耳元に囁き声が降ってくる。

「――試してみたいなら、来週、水曜日の夜に保健室においで」

「へ……っ」

「大丈夫、来ねえなら忘れるから。保健室わかる？ 榎本さんが貧血でぶっ倒れた時に運ばれたとこね」

「わ、わかり、ますけど……！ そんな、えっ……」

先生は言うだけ言って私の返事を待たず立ち上がり、部屋の外に出てしまった。意地悪く笑って、お先に、と言いながらドアを閉められる。

がちゃ、と音がした瞬間、状況を理解してばくばくと心臓が鳴り出す。

どうしよう、どうしよう……!!？

試してみたいけど、先生に？　こんな流れで……!!？　でも、本当に自分で触ってもよくわからないし……まあ、要は診察みたいなことかもしれないし……いや待って、診察なわけなくない!？

ぐるぐると考える最中、わたしは無意識のまま、先生が触れた首筋を確かめるようになっていた。

「……本当に来ちゃったんだ」

水曜日の夜、扉を開けた先生が、緊張でガチガチのわたしを目の前にしてふっと笑う。鳴りやまない心臓を抱えながら保健室に入ったわたしが言われたことは――先生の前で、

脱ぐことだった。

あまりに恥ずかしすぎる要求に従っているのは、先生に「感じないのは雰囲気や気持ちの問題も大きいだろうから、まずは気持ちを高めようか」と、言われて……。

これで高まるのは恥ずかしい気持ちだけな気もするんだけど——逆らえずにスカートまで下ろして、下着姿でベッドに座り込んでいる。

「せ、先生……これ、はずかしい、です……！」

「恥ずかしい？ いいね、その感覚ちゃんと感じて。恥ずかしい分だけ、気持ちよくなるから」

気持ちよく、なるんだろうか……期待からか不安からか、近づく先生にびくりと身体が震える。

腕が伸びてきて——下着を脱がされるのかと思ったけれど、優しく手を握られて、緩やかに押し倒されてしまった。視界には先生と先生の白衣しか映らなくなって、まるで閉じ込められているみたいだ。

「榎本さん、肌もすげー綺麗だけど……顔だけじゃなくて全身真っ赤になっちゃってんね。美味そ……」

「ひゃ…………っ、う……」

首筋に唇を這わされて、くすぐったくて身を振る。両手を縫い留められたまま、首筋から胸もとにかけて何度となく口付けられる。

こんな甘く触れられるだなんて思わなくて、胸が高鳴る。

「ん、ん……っせんせ、そこ……くすぐ、った……」

「ここ？　　撥つたいとこあったらもっと教えて。そこ全部、ほんとに気持ちいいところだから」

腋に近い胸元を触れられて、くすぐたさと恥ずかしさで逃げるように身を振っている、ふと先生の唇が止まる。瞬きをして先生のほうを見ると、胸の真ん中に視線が行っているのに気づいた。

——あ、そういえば、このブラ……真ん中がリボンになって……そこからも、外せるん

だった……！！

「……榎本さん、……これさ、俺が取っていいってことだよね？」

「へっ……あ、うう……っ」

意図したわけではないけれど、可愛いデザインだな…と思って、先生を思い出しながら買ったのだった。

確かめるように胸元をなぞる手にどうしてか息が乱れるのを感じながら、こくりと頷く。

「……あんま可愛いことされるとき、セーブ効かなくなるって。もうちょっとゆっくりやりてえけど、さすがにこれは早く触りたくなるでしょ…」

「えっと、ご、ごめんなさ……きゃっ」

するりとリボンが解かれておっぱいがぷるん♡ と露になる。

「胸もすげー綺麗じゃん、ここ自分で触ったことある？」

「う……あ、ありますけど……自分では、あんまり……」

「ふうん……じゃあ、今からここ、指ですりすりするけど、感じないよね？」

悪戯っぽく笑って、脇の下から緩やかに指が這わされる。

ゆっくりと伝う指が次第に乳輪をくるくる……くるくる……♡ となぞりはじめて、それだけで息が乱れはじめてしまった。

（どうして……こんな、敏感に……っ）

既にじくじくと身体の奥に熱が溜まり始めていて、ちっとも感じなかったのが嘘みたくに敏感になっている。

感じないはずなのに——先生の指がすり……♡ と、さきっぱをなぞった途端、びくりと身体が跳ねてしまった。

「ん、う……っ♡」

「……乳首すりすりすると身体ビクつくね。気持ちいい？」

「うう……っん……♡ わ、わか、んない…です……っ」

「ふーん……ちよっと触っただけで先っぽむくむく膨らんできてるけど、わかんないんだ……？」

すりすり♡

くにくに……♡

挿入するように囁かれながら何度もなぞられて、必死に首を振るけれど勃起は止まらなくて。次第にぴん……っ♡ と、主張するように硬くなってしまった。

「——じゃあ、もっと触れないと」

「……っう、恥ずか、し……っあ、う……♡」

こりこり♡ かりかり……♡

硬くなった乳首を指の腹で撫でられて、無意識のまま腰が揺れる。
激しい刺激じゃないのに、じっとしてられない。

「榎本さんの赤ちゃんみてえにかわいい乳首、ぴんって勃起あがってきてるね。俺に触って欲しそうに先っぽコリコリになってんの……わかる？　ここだよ」

「やあつ、わか、んな…っひ…、あ、んん…っ♡」

ぴんぴんっ♡

かりかりかり♡

恥ずかしさのあまりいやいやと首を振っていると、すっかりと勃起した乳首を爪先で弾かれる。

強い刺激に思わず甘い声が出てしまうのが恥ずかしくて口を抑えると、咎める言葉が飛んできた。

「だーめ、声抑えんなって」

「で、でも…せんせ、こんな、恥ずかし、…っ」

「さっき言ったでしょ、恥ずかしいは気持ちいい、だって。乳首カリカリされて声出ちゃう

の恥ずかしくて気持ちいい、でしょ？」

かりかり♡ ぴんっ♡

こりこりこりこり♡

勃起した乳首をきゅっと摘まれてゆるゆると擦られる♡

耐えようとする度に叱るみたいに爪で弾かれて腰がビクつく。調教されてるみたい、と思っただけに今まで感じたことのない甘い疼きを感じた。

「あ、あ…っ♡ …っおかし、こんな…じぶんで、やったときはあ…っ♡」

「全然感じなかったんだっけ？ じゃあ榎本さん、俺の手じゃないとダメってことになっちゃうね」

「うう…、やあ…っ♡」

「やだ？ 俺はいいよ、榎本さんが乳首でイけるようになるまでこうやって毎週乳首可愛がっても。その時はちゃんんと、先生今日も乳首カリカリしにきてもらいました、って言おうな？」

「そ、んなの……恥ずかし、あっ♡ あう……っ♡」

耳元で恥ずかしいことを言われる度にへこ…♡　へこ…♡　と、はしたなく腰が揺れる。じっとこちらを見る瞳から、かりかり♡　と乳首を擦る指からぞわぞわと疼きが広がる。だめ、気持ちいい、けど……♡　こんな、ちょっと触られたくらいでもものすごく感じちゃってるの、バレたくない……っ！

「子犬みたいにあっさい腰へこ、慣れてない感じしてすげえ可愛い……気持ちいいの、段々わかってきた？」

「あっ、うう……♡　わ、わかりま、せ……っ」

「ふーん……顔真っ赤になって、乳首ビンビンに勃起させて、腰くねらせてるけど……わかんないかあ……」

顔が近付いて、意地悪く囁かれる。

片手がお腹へと下っていった、おへその下を指でくいと押される。それだけの刺激なのに身体に力が入ってしまう。

「せ、んせ……だめえ、も、これ以上は…っ♡」

「どうして？ わかんないんでしょ？ それとも榎本さんは不感症って言ってたのにちよつと乳首こねられただけでとろとろになって腰へこつかせちゃうえっちな子だったの？」

「ちがっ、ちがいます……!」

「じゃあパンツの上からどう触られようとさ、わかんないよな？」

先生の手がお腹よりもつと下を撫でて、足の付け根を辿る。決して乱暴じゃなくて、ただゆるやかに撫でられているだけなのに…逆らうことのできない犬みたいに、足の間に隙間を作ってしまった。

こんな、会社でこんなことして、恥ずかしいし、はしたない…のに。

足を開いたことを褒めるようにおまんこをゆるく撫でられて、真ん中の割れ目をすり…♡となぞられて。

控えめに隠れているクリトリスを探し捉えて、布越しに、かり♡と、引っ掛かれる。

「…っひ、あ♡ せんせ、だめ…っ♡」

「ここ、触ったことある？」

「ない、ない、ですから…っあ♡ あっ♡ そんな、やめて♡ かりかり、だめ…っ♡♡」

すりすりすり♡

かりかりかり♡

びくびくと震えて逃げる身体を追うように片手でぎゅっと手を握られて、指を絡められる。それだけなのに抵抗がなくなる。

「初めてのカリカリきもちい？ 榎本さんのクリちよとずっと顔出してきたよ。俺の指好きって言うてるみてえでかいわい……、いっぱいカリカリするから、これが気持ちいいことだってしっかり覚えような」

「や、ああっ♡ だめ、そんな、覚えちゃったら、んんっ♡」

「覚えちゃったら、なに？ 毎日猿みてえにクリシコしちゃう？」

「ううっ、ちが♡ そんな、でしか、気持ちよく、なれなくなっちゃ…っ♡」

「くくっ……いいじゃん、ムラムラしたら来れば。榎本さんのこのちっちゃくてかわいいク

り、ずる剥けのえっろい立派なデカクリに育ててやるよ」

「やああっ♡ あ♡ はじか、ないでえ…っ♡」

えっちな言葉を囁かれるほどにクリトリスがびくびく♡ 反応して、大きくなってしま
う。もうパンツの上からでもわかるそれを、ぴんぴん♡ と弾かれて、その度に腰がヘコ
つく。

（だめ、もう、わかんないふり、できない♡ 気持ちよすぎるよお…っ♡）

ぬちゅ♡

くりくり♡ すりゅすりゅすりゅ…っ♡♡

「あぁっ♡ ひ♡ それえ、ぬるぬるするの、やあぁ…♡」

「やだっつつたって、榎本さんのまんこがぬるぬるになっちゃったからじゃん。あーあ、パ
ンツやば…初めて触られたのにこんなぐちよぐちよにさせてさあ、恥ずかしいね？」

「うう、恥ずかし、っひ、♡ あう♡ んん…っ♡」

「くくっ、喘ぎ声きたなくなってきたてかわいいー…ほら、思い出して。恥ずかしいのは？　なんだっけ？」

「…恥ずかし、いのは…っ、」

「恥ずかしいのは…？」

「…きもち、いい…っ♡」

よく言えました、偉いね、榎本さん。そんな声が遠くに感じる。

震えた声を絞り出した瞬間、ほとんど意味を成していないパンツをずらされて、勃起したクリトリスをちゅこちゅこ♡と擦られてしまったから。

「あ♡　せん、せえ♡　うあ、あっ♡　こ、れ…っむり、っ♡♡」

「ご褒美のクリシコ、気持ちいいでしょ？　マン汁いっぱい出てるからやりやすいわ」

ちゅこちゅこちゅこ♡

くりくり♡　くにゅくにゅくにゅ♡

「ひ、ッ♡ だめえ、しこしこ、とめて♡ くりしこ、やだああ……っ♡」

「なんで？ 気持ちいいでしょ？ ちゃんと感じられてよかったじゃん。でもさあ……こんなよわよわのクリ、他の人にバレたら大変だよ？ どうすんの、今急患ですってノックされたら」

「うう……っだめ、ぜったい、っあ、ああ♡ だ、めえ……っ♡」

「くくっ……クリはぴくぴくしてっけどね、誰かに見られるかもって思うの興奮すんだ？」

しこしこ♡ しこしこ♡ と指先でクリを摘まんで何度も擦られる最中、ふと先生の顔が見えなくなったことに気付く。

不思議に思う暇もなく、ぺろ♡ と先生の舌がクリトリスに這わされた。

「あっ、あ！？♡ せっ、んせえ、だめ♡ あうづっ♡ そんなの、だめええ……っ♡」

ちゅ♡ はむ♡
れろれろれろ♡♡

「は……、つくく、すげえ身体びくびくしてんじゃん。モロ感でかーわい……でもあんま動かれると俺のペロ榎本さんのまんこに入っちゃうわ、ちよっと我慢して？ 両手ギュってしていいから」

「うう……っ、でも……っなめ、るの……むりです、せんせえ……っ」

指同士を絡めてぎゅっと繋がれる。あまりの快感に継るものが欲しかったわたしは、先生よりも強く力をかけて握ってしまった。子供みたいにいやいやと首を振るけれど先生は笑うだけで。

「榎本さんのクリちっちゃいからシコりにくくってさあ……これから大きくするから頑張ろうな？ そしたらもっと気持ちいいから」

「お……おおきく、する……？」

「そ、今から一生懸命勃起してる榎本さんのクリにキスしてそのまま吸って、先っぽは舌でちろちろって舐めんの」

「やっ……やあ……も、だいじょうぶ、せんせ……もう感じてるから、も……っ♡ ああっ、

だ、めえ……っ♡」

ちゅ♡ ぢゅうううっ♡

ちろちろ♡ れろれろれろ♡

これ以上の快感が怖くて身を引こうとするけれど、捉えられてしまった手がそれを許さない。

宣言通り、先生の口に捕まえられたクリは勢い良く吸われてしまつて、先端を飴のように舐められる。

「あ、あ……っ♡ ひ♡ も、も……っきもちいい♡ いい、から♡ ん♡ も、やめてええ……っ♡」

「ん？ なんれ？ ひもちいいなら、いいじゃん」

「ちがぁ、も、あぁ♡ あうっ♡ かんじてる、から♡」

必死にやめてもらおうとするのに先生は全然やめてくれない。それどころか嬉しそうに

ちゅ♡　ちゅう♡　と吸い付いては、裏筋をれろれる♡　と舐められる。

「ん……、でも榎本さん、まだイってないでしょ？」

「へ……っ」

「気持ち良くなるの覚えられたなら、いくのも覚えねえと。これから榎本さんがいくまでクリ舐めるから」

「やあ、そん、なの……しんじゃ、う……っ」

「なにそれ、煽ってんの？　可愛すぎるでしょ……ああ、いきそうになったらいくって教えて？　じゃないとやめらんないから」

先生はほとんど一方的に言って、またわたしのおまんこに顔を埋めてしまった。

ちゅう♡　ちゅぽっ♡

ぬるぬる♡　ぬるうう……っ♡

「ひ、ああっ♡　せん、せえ……さきっぱ♡　すうの、だめえ……っんあ！♡　ぬるぬる

も、だ、め……んん……っ♡♡」

舌のざらざらした部分で全体をぬるう……っ♡と舐められてしまって身体が仰け反る。

吸われては先を舐められるのを何度もしっこく続けられて、奥からぞわぞわと絶頂感が漂ってきた。

先生はそれを察知したようにわたしの手を掴んでぐっと引き寄せる。

「ひ、あぁ……っやぁ♡ あぁ♡ せん、せ……、なんか……きちゃ、ぐう……っ♡」

「ん……、いいよ。このままクリアクメできるよう頑張って」

「うう……っそんな、だめえ……っ♡」

勃起しきったクリトリスを的確に捉えられ、舌先で一定の刺激をずっと与えられる♡

ちゅくちゅくちゅく♡

ぬるぬるぬるぬる……っ♡♡

(あたま、まっしろに、なっちゃうう……っ♡)

「んあ、あつ、せ、んせ……つわた、ひ……っも……っ………~~~~~ッッ……♡♡」

何も考えられず、追い上げられるままにびくびくっ!!と身体が跳ねた。おまんこの穴からとろお……♡と愛液が溢れる。

余韻に全身の力が抜けて握っていた手の力を緩めると、そのまま手を離される。やっと、終わった——と思うていると、内もものにちゅ、と軽く口付けられてまた、びくりと身体が跳ねる。

「ふ……、ちゃんとイけたじゃん。身体縮こまらせてビクビクして、中学生みてえないき方だったけど。気持ちよかった?」

「うう……っ、は、はい……。不感症じゃ、なかった……です……」

「くくっ……一生懸命感じててすげえ可愛かった。——でもさあ」

「へ……」

「榎本さん、いくときは教えてって言ったのに、言えなかったよな?」

「はっ、あ……っご、ごめ、なさ……っ」

「まあ初めてクリイキしたんだもんな？　いくだけで精一杯だっただろうから——ちゃんと言えるようになるまで、アクメの感覚身体に覚えさせねえと」

そう言って先生は愉しそうに笑った。

先生の手が無防備に力を抜いていたままの下腹をなぞる。そのまま溢れた愛液でとろとろのおまんこを撫でて、ちゅぷ……♡と指を埋められてしまった。

まだ終わらないの、と身体が震えるのに、整った顔から目が離せず、動くこともできなかった。